

威風堂々プロジェクト2020・実施記録（第3回）

1. 実施日：2020年2月8日（土）13：30～15：30

2. 場 所：伊都キャンパス 図書館

3. 参加者

応援団O B 吉川 正、羽田野袈裟義

4回生 那須龍太郎、山内勇人、長砂まりも

3回生 津田健吾、中島颯也

2回生 川口潤一郎、小出尚寛、佐々木晟、
柏木海翔、百合岡咲紀



4. 配付資料

「大学応援団という空間とその身体」（参考文献）

5. 「大学応援団という空間とその身体」について（1回目）

（1）参考文献の概要は、以下のようである。

（0）はじめに、瀬戸那弘氏（早稲田大学スポーツ科学研究センター研究員）が著作した「近代日本の身体表象」（初版：2013年10月）より抜粋する。

学生応援団は明治期に始まる。戦後の復興期から昭和45年頃の応援団ブーム頃までに、蓄積された史料や言説を基に、応援団が求め育んできた学生身体文化を考察する内容である。



（1）学生運動部は、外来文化としてのスポーツの受け皿としての役割を担った。外来文化をそのままの形で受容することは不可能であり、必然的に変容しながら伝播するものといえる。そのため運動部はこの過程において、新たな文化の醸成・発信基地の役目を担うことになった。

戦後、体育会運動部の根底には、少なからず戦前の思想的な価値観が残存することにもなっていた。そこでは、我々が現在“伝統的クラブ観”と理解する思想が生成されることになったのである。つまり、伝統的運動部は「戦前の日本人とその思想」が生き残りやすい空間として存続したともいえる。

（2）大学応援団の歴史と役割としては、スペクテータースポーツ（観戦スポーツ）において、同空間では興奮に乗じた観客同士の衝突も散見され、それらは大きな社会問題となることもしばしばである。秩序だった応援空間を形成・維持することは、スペクテータースポーツのひとつの「前提」ともいえ、組織的団体応援の必要性が、日本の応援団の誕生を後押ししたと思われる。日本の大学応援文化は復活・継承されていくことになったのである。

（3）応援団の継承する象徴的世界としては、応援団では、時に「時代錯誤」とも揶揄される伝統的な行動様式を継承する向きがある。見方を変えればそれは、彼らが独自の身体文化の維持・再生産のために、求めて行う営みである可能性を指摘する。応援空間には社会構造や社会規範を表出させ安定した社会価値を再生産する働きがあり、ひとつの儀礼として理解できる。応援団の儀礼性とは宗教的文脈、あるいは実際の宗教空間とも深く結びつき、その神聖性を醸成してきていることも指摘したい。

たとえば、応援団にとり応援団旗とは単なる道具の範疇に留まるものではない。つまり、応援団の構成要素と背景には、近代日本が歩んできた時代の記憶とその残滓が確認できるといえるのである。すなわち、応援空間とは、神聖性に溢れた「儀礼空間」といえるのである。

(4) 応援空間という儀礼空間を維持・安定させるために、団員たちは先人たちの「魂」を象徴的に継承し、伝統的な行動様式や所作などを踏襲することになる。このいわば儀礼の執行者として、それを支える身体を獲得が求められることになるといえる。そのため彼らは独自の鍛錬法によって体力、声量、声質、言語、所作、応援技法の習得の徹底などが図られ、初めて応援団の構成員たる身体を獲得するプロセスを有している。“シゴキ”というこの一見「非合理的な営み」には、伝統的集団の維持・強化のための「必然性と必要性」が存在していたとの意味合いも指摘したい。(ここまで第1回、以下第2回)

(2) 上記概要を整理すると、以下のようになる。

- 1) 野球、サッカーなど外来観戦スポーツが輸入され、交流試合が盛んに行われた。
- 2) 学生応援団は、興奮する大人数の観客を統制、指導するために後押し、創設された。
- 3) 学生応援団には、試合の勝つための“神通力(運、ゲン)”が期待された。
- 4) 神聖な儀礼空間を維持・安定させるために、団長、団旗、演舞などが存在する。
- 5) 新入団員は、一見「非合理的な営み」を「必然性と必要性」として鍛錬し、その構成員として認められる。

(3) 参加者から、以下の発言があった。

- 1) 九大応援団は、七大戦を応援するために昭和39年に創設された。
- 2) 観衆を指導する機能を持つ関東地区とは違う発祥形態といえる。自分たちが応援する。
- 3) 儀礼的空間や神通力を、意識したことはなかった。
- 4) 吉川の時代には、大太鼓を地面に置いて叩いていた。神聖性は感じていなかった。
- 5) そういえば、北大は現在でも、太鼓を踏んづけて叩いているのではないかな。
- 6) 現在のほうが、団旗や太鼓を大事にしているようだ。神聖性とは違うかな。
- 7) 吉川の時代には、私立大応援団は自校が負けたときに、下級生がビンタを食らっていた。
- 8) 現在でも、試合に負けたときは“応援の質が良くなかったかな”と考えることがある。

6. 次回について

- 1) 2/29(土) 13:30～、伊都キャンパス・図書館
- 2) テーマは、「大学応援団という空間とその身体」(2回目)である。

以上